

(別紙1)

## 論文の内容の要旨

論文題目 『父母恩重経』諸本の研究

氏 名 新 井 慧 誉

『父母恩重経』は当初より偽経の烙印を押された。そしてそれ以来、その偽経としての評価は仏教の長い歴史の中であって、ついに変わることなく今日に至っている。中国で撰述された偽経は数多にのぼるが、その多くは歴史の過程で埋没し失なわれていった。しかしこの『父母恩重経』は、いずれの王朝権力、いずれの仏教教団の教理体系から疎外されても、中国を中心とした東アジア仏教文化圏の大多数の民衆に、力強く流行し発展してきた数少ない偽経である。

親に対する孝を表面上のモチーフとして扱い、人々の情感をひきつけた上で、孝とは報恩のことであると位置づけている。そして報恩を通して、三宝帰依や経典受持などが仏教信者のあり方であると主張していくのであるが、そうした本経撰述者の宗教的ねらいは中国文化社会にぴったりマッチし、人々の根強い信仰と支持を得た。実はそのことは、朝鮮や日本にもあてはめていえることである。

本論文は『父母恩重経』を研究テーマとし、まず「序論」において『父母恩重経』の位置を論じ、この経典の主テーマである恩について整理した。

「本論」では、第一章において、『父母恩重経』とよばれる経典には恩重経系と大報経系の

二系経があることを述べた。そしてそれぞれに属する経典の現存テキストを可能なかぎり蒐集し、経典ごとに対校して校異テキストを作製した。そのことにより各経典のテキスト間のバリエントが明瞭になり、同一経典でありながらも系統を異にする場合があつて、相互間に展開の推移があつたことが知られる。

第二章では各経典の校異テキストの内容を検討し、その成立なり性格なり特徴なりを論じた。そうすることで、各経典間の展開史をかなり追求しえたと思っている。また『胎骨経』とか『省略経』とか黒水城発見の『父母恩重経』、または大足県に刻まれている『報父母恩徳経』といった改訂諸本にも論及した。そうした中であつて、経典から派生して作られたともいふべき『十恩徳讃』や大足の『父母恩重経変相像』にもふれることができた。そうしたことを、以下に総まとめとして整理し、本論文の結論に代えたい。

『父母恩重経』の諸本はいずれも中国撰述の偽経である。

『父母恩重経』の最初の記録は『大周録』とされているが、実はその記録は『大周録』の高麗版のみに出ているだけである。一方、『開元録』の中で『父母恩重経』は従前の経録に未載であると記しているから、『大周録』には本来『父母恩重経』の記録はなかったのではなからうか。よつて『大周録』高麗版の記事はなんらかの誤記であると思われる。そのことを前提におくならば、『父母恩重経』のオリジナル本は『丁蘭本』なのであるが、その偽作時は『大周録』編纂の六九五年から『開元録』編纂の七三〇年の三五年間に求められることになる。

『開元録』の著者智昇は、『丁蘭本』には丁蘭等の中国人孝子名を経文に説いているとの理由で、偽経であると烙印した。すなわち智昇は『丁蘭本』を實際に手にとつてその判定を下したのである。したがつて『父母恩重経』は当初のオリジナル本から偽経とみなされたのであり、その結果『丁蘭本』はもちろんのこと、その他の『父母恩重経』類は一切入蔵されることはなかつた。しかしその普及はたいへんに大きかつたとみえ、『丁蘭本』そのものも、そして『古本』などその後の改訂本も、時代と場所に応じて人々の信仰を集めた。『父母恩重経』の偽作目的が仏教の大衆教化にあつたことを思うと、所期の目論見は的中したといつていい。

そもそもこの經典の説く内容は、子が父母から受ける恩は重く甚大であり、それへの報恩は不可欠であり、そして真の報恩は世俗的で物質的な親孝行ではなく、經典の受持や読誦や書写といった仏教的実践を行うことであるという。その報恩行こそ子のあるべき孝順の姿であるとし、中国伝統の孝思想と関連させながら報恩の大切さを説いている。

ところで『父母恩重經』の諸本は、恩重經系と大報經系の二系統に分類できる。まず前者の流れがあって、あとで後者が成立し発展していった。

まずは恩重經系であるが、『丁蘭本』が『開元録』で偽經と判定されたあと、その改訂版として『古本』『報本』『増益本』が作られた。次に大報經系であるが、そのオリジナル本は『報原經』である。恩重經系の説相をベースとして、少くとも円照が『貞元録』をまとめた八〇〇年には偽作されていたと思われる。『大報經』は、これまで朝鮮本と日本本が知られていたが、研究の結果、両者の系統は少しく異なることがわかった。かつまた朝鮮本については、〈K1〉系統と〈K2〉系統に分けられることも判明した。『重難報經』は、『大報經』がさらに改訂されて成立した經典である。その改訂時期はあまり古くはないのではなかろうか。

大足県の「父母恩重經變相像」は、これまで一般にはそのように通称されてきているが、便宜上そのように通称するのはいいとしても、厳密に言えば「報父母恩徳經變相像」というべきである。

『父母恩重經講經文』は〈P18〉と〈北72〉の敦煌本二点が知られている。両者を対照研究したところ、両者とも『報原經』に対する講經文であることがわかった。またさらに検討を深めた結果、前者は『報原經』のうちでも朝鮮本〈伊上〉に代表される新型のテキスト、後者は敦煌本〈P9原〉などの古型のテキストを講經対象としているようである。なお〈P18〉や〈北72〉のオリジナル本は、五代十国時代（九〇七～九六〇）というより晩唐時代（八四七～九〇七）にできたと考えてよからう。

「本論」の第三章では、『父母恩重經』の成立に伏線として影響を与えたと思われる『父母恩難報經』と『父母經』と『盂蘭盆經』をとりあげた。いずれも『父母恩重經』偽作に当たったの先在經典であると考えられる。

